

マイルス、コルトレーン、ビル・エヴァンス――

ジャズ・ジャイアント

たちの
20代録音

「**青の時代**」の音を聴く

神館和典



巨人たちは
20代のころ、
こんな音を出していた!

著者が直接
インタビューした
貴重な証言多数!

デビュー前のアイデアや思いを爆発させた

「**青の時代**」の名盤を聴き直す!

ジャズ・ジャイアントたちの
20代録音「青の時代」の音を聴く

神館和典

星海社

277



1998年11月から2000年10月、ニューヨークを拠点にジャズの取材をしていた。ニューヨークへ渡ったきっかけは、ちよつとした思いつきに過ぎない。『ニューヨーク帰りの音楽ライター』になろうとしたのだ。

出版界が斜陽産業と言われるようになりもうずいぶん経つが、1990年代当時はまだそれほどひどくはなく、競合する書き手もたくさんいた。

そのなかに埋もれてしまうことを恐れ、ニューヨーク帰りの書き手になろう、という考えに至った。箔を付けたかった。あざとい発想だ。

ニューヨーク行きを決めると、思いがけず周囲が手を差し延べてくれた。

某大手出版社のスポーツ誌がNBA（アメリカのプロバスケットボールリーグ）とNHL（アメリカとカナダのプロアイスホッケーリーグ）、格闘技専門の出版社がボクシングの世界戦のメディアパスを用意してくれた。レコード会社各社はアーティストのインタビューをア

レンジしてくれた。

追い風が吹き始めると、欲が膨らんでいく。せつかくニューヨークで取材をするのだから、成果を上げたい。

そこで、生きている著名なジャズ・ミュージシャンに全部会うことを自分のミッションの一つにした。ジョン・コルトレーンやマイルス・デイヴィスは永眠していたが、ジャズ史にその名を刻むレジェンドの多くはまだ健在だった。しかも、かなりのミュージシャンはニューヨーク在住だ。

なぜジャズをテーマに選んだのか――。

1980年代から東京でジャズ・ミュージシャンのインタビューをしていた。つまり、誇れるほどではないにしても実績はあった。ロック・ミュージシャンは、映画俳優同様セレブリティ度が高く、なかなか会えない。一方、ジャズ・ミュージシャンたちは、気さくに取材に応じてくれる。

追い風はつづいた。取材態勢が整うと、二つのメジャーな雑誌が定期的に記事を書くペー지를用意してくれた。どちらも月に二回発行する媒体だった。

十分な援軍を得て、1998年11月、ニューヨークへ渡った。最初に滞在したのは西83

丁目のレンタルアパート。そこを拠点に取材をしながら、住む部屋を探した。そして1999年1月からは東77丁目にステューディオ（日本でいうところのワンルームマンション）を見つけた。家賃は1225ドル。当時のレートで15万円くらいだ。

ニューヨークでの2年間、ライブを観まくり、ジャズ・ミュージシャンをインタビューしまくった。

ソニー・ロリンズ、ウエイン・ショーター、ロン・カーター、マッコイ・タイナー、ハービー・ハンコック、チック・コリア、ジョージ・ベンソン、ヘレン・メリル、デヴィッド・サンボーン、ラリー・カールトン、マイケル・ブレッツカー、ジョン・スコフィールド、リー・リトナー、パット・メセニー、マークス・ミラー、ブランフォード・マルサリス、ダイアナ・クラール……など。

もちろん、すべてのインタビューをニューヨークで行えたわけではない。来日公演に合わせて筆者も帰国し、都内のホテルでお目にかかったケースも多い。ハービーやチックの最初のインタビューも来日公演のときだった。

当時は新潟県と長野県の県境にある斑尾高原で「ニューポートジャズフェスティバル in 斑尾」が毎夏行われていて、多くのジャズ・ミュージシャンが参加していた。マッコイに

はその会場近くのホテルで会った。

アメリカ国内でも出張した。ウェインのインタビューを申し込んだら、自宅に招いてくれた。当時の彼の家はロサンゼルスハリウッド。サウンドシティという街で暮らしていたので、アメリカ西海岸まで出かけて行った。

そんなアメリカ時代を経て、今も地道にインタビューを重ねている。

ジャズのインタビュで印象的なのは、多くのミュージシャンが自分の若手のころ、この本でいう「青の時代」について積極的に語ることだった。希望と不安、相反する感情を持ち、自分の音を探していた時代を話してくれた。

ジャズには、前の世代から受け継いだ音楽のDNAを次世代へと伝えていく文化がある。1940年代が全盛期だったチャーリー・パーカーが「モダン・ジャズの父」ならば、彼のバンドで育ったマイルス・デイヴィスは「子ども」の世代といえるだろう。

そのマイルスのバンドで育ったウェイン・ショーター、ハービー・ハンコック、キース・ジャレット、チック・コリアあたりからジョン・スコフィールド、マークス・ミラーは「孫」の世代。

晩年のウェインと音楽制作をしていたエスペランサ・スポルディングや、浜松の高校生

時代にチック・コリアと共演しデビュー後にはデュオのアルバムも録音した上原ひろみは「ひ孫」世代と言っていいかもしれない。

若い音楽家は先達のDNAを血肉にして、新しい音を生み育んでいく。

ウエインもハービーもジョンスコもマーカスも、マイルスのバンドにいた時代を話してくれた。自分のルーツという認識なのだろう。

青の時代の演奏は概して粗い。音数も多い。弾かなくてもいいスペースも音で埋め、リーダーに叱られることもあっただろう。しかし、若いからこそそのあふれんばかりのエネルギーが感じられる。

「人間は若々しい精神を抱いてスタートを切る。それが探求しようという意欲を支える。だがときが経つにつれ、私たちはそんな精神を失っていく」

これは『ハービー・ハンコック自伝 新しいジャズの可能性を追う旅』(DU BOOKS)のなかのハービーの言葉だ。

本書では、粗くもあり、荒々しくもある、ジャズのレジェンドたちの30歳までの録音を当時のエピソードや本人たちの発言を交えながら紹介していきたい。

なおアルバムは、あくまでも筆者の主観でセレクトさせていただいた。音楽はあくまで

もリスナーの好みで聴くもの。選者によって選ぶアルバムは違う。また、一人のリスナーでも、聴く年齢や季節やコンディションによって感じ方が異なる。

また、本書は基本的に、本人のコメントをベースに書き進めた。そのため、著者が直接インタビュールしたジャズ・ミュージシャン、あるいは自伝があるジャズ・ミュージシャンの作品を多く、手厚く紹介している。生あるいは生に近い資料が少ないアーティストの作品は十分にご紹介していいことも了承していただきたい。

引用部分は、出典の図書と同じ表記になっている、人名をはじめとする固有名詞や数字の表記など、本文と異なるケースがあることもご容赦いただきたい。

目次

はじめに 3

第1章 1950〜1960年代、ニューヨークの青春

17

ハービー、トニー、ロンの青の時代 18

若いエネルギーが爆発した『フォア&モア』 21

独創的なトニー、頼れるロン 23

アコースティックは水彩画。エレクトリックは点描画 26

『エンピリアン・アイルズ』のフレディ・ハバード 28

黄金のクインテット 32

ウェインとコルトレーン、デビュー前の邂逅 35

王道のジャズ『イントロデビューシング・ウェイン・ショーター』 37

第
2
章
引き継がれるジャズの遺伝子

79

若きコルトレーンの代表作『ブルー・トレイン』 41

モダン・ジャズを象徴する『サキソフォン・コロツサス』 45

貧しさとの闘いでもあったレジェンドたちの青春 48

ビリー・ホリデイ「奇妙な果実」のリアル 52

マイルスとコルトレーン、黄金コンビの『ラウンド・アバウト・ミッドナイト』 56

最高峰のトランペット奏者、クリフォード・ブラウン 59

『ヘレン・メリル・ウィズ・クリフォード・ブラウン』の奇跡 61

ビル・エヴァンスが29歳で参加した『カインド・オブ・ブルー』 63

ジャズ・シーンでは白人がマイノリティ 67

マッコイ・タイナーとコルトレーンの蜜月時代 69

『ザ・リアル・マッコイ』で演奏を確立? 73

ヴィレッジ・ヴァンガードで自分を売り込んだキース・ジャレット 80

キース・ジャレットとチック・コリアの共存 83

『マイルス・デイヴィス・アット・フィルモア』の聴きどころ 86

奇跡的なソロ・ピアノ作『ザ・ケルン・コンサート』 91

ジャズを新しいフェイズにいざなつた『ピッチェズ・ブリュー』 93

ジョージ・ベンソンは10代でピッツバーグからニューヨークへ 96

若きベンソンが黄金のクインテットと渡り合つた『マイルス・イン・ザ・スカイ』 99

フェンダー・ローズの登場 101

ベンソンの新境地だつた『アビー・ロード』 105

ゲイリー・バートンの楽屋に押し掛けたパット・メセニー 107

『アメリカン・ガレッジ』『トラヴェルズ』『パット・メセニー・グループの哀愁』 110

第3章 ロックの洗礼

115

フュージョンの波 116

日本で大ブームになったラリー・カールトンとリー・リトナー 118

メセニー、ブレッカー、ジャコを起用した『シャドウズ・アンド・ライト』 121

ウエザー・リポートの黄金期はジャコ・パストリアスの青春期 124

『ジャコ・パストリアスの肖像』の衝撃 127

青春のまま永眠したジャコ 129

世界一のベーシスト 132

ロックを経由したマイケル・ブレッカーの『ヘヴィ・メタル・ビ・バップ』 134

ビッグバンドで身につけたコブのある演奏 137

ウイントン・マルサリスのバラード集『スターダスト』 140

ブランフォードとケニー・カークランドの青春 142

ジャズ・シーンから生まれたステイニング・バンド 144

第4章 レジェンドが欲した青の時代のエネルギー

『プリング・オン・ザ・ナイト』のグルーヴ 147

すぐれたミュージシャンとの出会いが自分をレベルアップ 152

偉大な音楽家を持つマジック 155

ジョン・スコフィールドが忘れられないデトロイトのギグ 159

『スター・ピープル』の火を噴くようなギター 162

ダリル・ジョーンズは19歳で『デコイ』に参加 164

マーカス・ミラー、20代のフェアリーテイル 167

27歳のマーカスが60歳のマイルスをプロデュースした『TUTU』 171

マイク・スターン27歳の『デブの時間』 174

「パーティーに行ったら、帰ることも忘れるな」 178

第
5
章
新しいジャズを生む才能たち
181

ジョシユア・レッドマン、上原ひろみ、エスペランサ・スポルディング 182

ジョシユア・レッドマン、20代の課題 183

若き日のジョシユアの集大成『ビヨンド』 185

毎アルバム異なるアプローチの上原ひろみ 188

ひろみがチック・コリアとジャズをやった『デュエット』 190

ノーベル平和賞コンサートでパフォーマンズ 194

『ラジオ・ミュージック・ソサイエティ』はシンガーが二人いるよう 197

参考文献
232

おわりに
230

MILES

DAVIS

1

第 章

1950～1960年代、
ニューヨークの青春

HANCOCK

JOHN

COLTRANE

ハービー・トニー・ロハの青の時代

ジャズを志す若いミュージシャンたちは皆、ニューヨークを目指す。現在も、1950年代も、ジャズ・ミュージシャンの多くは、ある時期ニューヨークを拠点に活動している。チャンスがあふれている街だからだ。日本でも成功を夢見る若いミュージシャンたちは東京へ向かう。それと近い状況がアメリカにも存在する。

ニューヨークは、昔も今も街中にジャズクラブが存在してきた。ミントンズ、スリー・デューセス、オニックス・クラブ、ケリーズ・ステイブル、ヒートウェイヴ、スポットライト、ルースト、ロイヤル・ルースト、バードランド、カフェ・ボヘミア、ヴィレッジ・ヴァンガード、ヴィレッジ・ゲイト、ブルーノート、ボトム・ライン、イリディウム、ジャズ・スタンダード……など。

ニューヨークの中心、マンハッタンの面積は約60平方キロメートル。これは東京23区の面積の約10分の1。これだけ狭いなかにかくさんのクラブが共存してきた。時代とともにクローズした店もたくさんあるが、ヴィレッジ・ヴァンガード、バードランド、ブルーノ

ート、イリディアムには今も一級のジャズ・ミュージシャンが出演している。

こうしたクラブの多くは、昼の部や日曜日に若手が出演するワクやセッションの時間を設けている。後述するが、ピアニストのレジエンド、キース・ジャレットはボストンからニューヨークへやってきてヴィレτζジ・ヴァンガードのセッションに通いつめ、演奏を聴いたアート・ブレイキーにスカウトされている。

また、ニューヨークにはジャズ・ミュージシャンがたくさん暮らしている。狭いマンハッタンは徒歩でクラブへ訪れることができるので、客席にミュージシャンがいることも多い。彼らの目に留まり、若手がバンドに誘われて次のステップに進むケースは少なくない。ベテランのミュージシャンは常に、若く力のある新人を探している。頻繁に紹介し合っている。実際、本書に登場するミュージシャンたちのほとんどが、若い時代は住まいをニューヨークに移し、そこでチャンスをつかんできた。

さらに、ニューヨークには多くのレコード会社もある。スタジオも多い。音楽をつくる環境が整っている。

そして、ニューヨークでの評価は、ストリートに世界的評価につながる。『ニューヨーク・タイムズ』の評は世界のミュージックシーンに影響する。ニューヨークで上質のギグ

を行えば世界に発信され、ニューヨークで最悪のギグをやってしまい『ニューヨーク・タイムズ』で酷評されると世界的評価も下がる。いずれにしても、自分の力をワールド・レベルで試すにはニューヨークで勝負するべきなのだ。

この章では、セントルイスから来たマイルス・デイヴィス、シカゴから来たハービー・ハンコック、近所のニュージャージー州ニューアークから来たウェイン・ショーター、やはりニュージャージー州のプレインフィールドから来たビル・エヴァンス、フィラデルフィアから来たジョン・コルトレーンやマッコイ・タイナーやマイケル・ブレッカー、アレントウンで生まれてボストンの音楽大学へ出てきたキース・ジャレットなどのニューヨークでの青春の日々とともに、彼らの30歳までのアルバムを紹介していきたい。

もちろん彼らのすべてがずっとニューヨークにとどまっていたわけではない。マイルスもハービーもウェインも、レジェンドの域になってからは気候のいい西海岸へ移っている。ウェインはロサンゼルスからさらにフロリダに移った。チック・コリアもフロリダで暮らした。しかし、勝負していた若い時代はニューヨークだ。

若いエネルギーが爆発した『フォア&モア』

今、この本を書きながら、マイルス・デイヴィス（トランペット）の『フォア&モア』を聴いている。いうまでもなくマイルスの名盤の一つで、1964年2月12日にニューヨークのリンカーン・センターにあるフィルハーモニック・ホール（現デイヴィッド・ゲフィン・ホール）で行われた。ルイジアナ州とミシシッピ州の黒人選挙権獲得運動の慈善コンサートの録音だ。

1960年代はマイルスの黄金時代。『フォア&モア』は、1926年にイリノイ州オールトンで生まれた彼の37歳のときの演奏。30歳までの音楽という本書の定義からはずれていると言われそうだが、このギグはハービー・ハンコック（ピアノ）が23歳、トニー・ウィリアムス（ドラムス）が18歳、ロン・カーター（ベース）が26歳、ジョージ・コールマン（テナーサクソ）が28歳という若いメンバーによるクインテット。今ではレジェンドといわれている音楽家たちの青春時代だ。

収録曲は「ソー・ホワット」「ウォーキン」「セヴン・ステップス・トゥ・ヘヴン」など

6曲。ハービーもロンも現在とは比較にならないほどラウド。火を噴くような演奏が続く。「あんなにラウドな演奏をやっていたなんて、自分自身信じられない」

ロン・カーターにインタビュしたときに、彼も語っていた。1998年のニューヨーク、西53丁目にあるスタジオ・アヴァタで会ったときだった。ここはかつて、パワー・ステーションという名前だったスタジオ。キース・ジャレット、マイケル・ブレッカー、パット・メセニー、上原ひろみも録音に使っている。ロック系では、ジョン・レノン、ブルース・スプリングステイン、ボン・ジョビも使用した。

年齢を重ねたロンは、落ち着いたたまたまずまいでボサノヴァを録音していた。

『フォア&モア』はライブ録音で、この日のギグから2枚の名盤が生まれている。『フォア&モア』と『マイ・ファニー・ヴァレンタイン』だ。

「ソー・ホワット」や「セヴン・ステップス・トウ・ヘヴン」のようなアップテンポで演奏されたナンバーは『フォア&モア』に、「マイ・ファニー・ヴァレンタイン」や「星影のステラ」などバラード曲はもう一枚の『マイ・ファニー・ヴァレンタイン』に収録された。たとえば『フォア&モア』の「ソー・ホワット」は、スタジオ録音した『カインド・オブ・ブルー』よりもスピード感がある。

読者のための
レコードガイド

RECORD
GUIDE

Index (50 音順)

- 80/81 / パット・メセニー 222 上
- TUTU / マイルス・デイヴィス 227 下
- アビー・ロード / ジョージ・ベンソン 220 下
- アメリカン・ガレージ / パット・メセニー・グループ 221 上
- イントロデューシング・ウェイン・ショーター /
ウェイン・ショーター 208 下
- インプレッションス / ジョン・コルトレーン 214 下
- ヴィレッジ・ヴァンガードの夜 / ソニー・ロリンズ 210 下
- エンピリアン・アイルズ / ハービー・ハンコック 208 上
- カインド・オブ・ブルー / マイルス・デイヴィス 213 下
- キャプテン・フィンガーズ / リー・リトナー 223 上
- 奇妙な果実 / ビリー・ホリディ 211 上
- クッキン / マイルス・デイヴィス 212 上
- ザ・ケルン・コンサート / キース・ジャレット 218 下
- ザ・リアル・マッコイ / マッコイ・タイナー 216 下
- サキソフォン・コロッサス / ソニー・ロリンズ 209 下
- サムホエア・ピフォー / キース・ジャレット 217 下
- 至上の愛 / ジョン・コルトレーン 215 上
- ジャコ・パストリアスの肖像 / ジャコ・パストリアス 224 上
- シャドウズ・アンド・ライト / ジョニ・ミッチェル 223 下
- スター・ピープル / マイルス・デイヴィス 226 下
- スターダスト / ウィントン・マルサリス 225 下
- セヴン・ステップス・トゥ・ヘヴン /
マイルス・デイヴィス 207 上
- テイキン・オフ / ハービー・ハンコック 207 下
- デコイ / マイルス・デイヴィス 227 上
- テナー・マッドネス / ソニー・ロリンズ 210 上
- デュエット / チック・コリア、上原ひろみ 229 上
- トラヴェルス / パット・メセニー・グループ 221 下

ナウ・ヒー・シングス、ナウ・ヒー・ソブス／	
チック・コリア	219 上
バラード／ジョン・コルトレーン	214 上
バラードとブルースの夜／マッコイ・タイナー	216 上
ピッチェズ・ブリュー／マイルス・デイヴィス	219 下
ビヨンド／ジョシュア・レッドマン	228 下
フェイシング・ユー／キース・ジャレット	218 上
フォア&モア／マイルス・デイヴィス	206 上
ブリング・オン・ザ・ナイト／スティング	226 上
ブルー・トレイン／ジョン・コルトレーン	209 上
ヘヴィー・ウェザー／ウェザー・リポート	224 下
ヘヴィ・メタル・ピ・バップ／	
ブレッカー・ブラザーズ	225 上
ヘレン・メリル・ウィズ・クリフォード・ブラウン／	
ヘレン・メリル	213 上
マイ・ファニー・ヴァレンタイン／	
マイルス・デイヴィス	206 下
マイルス・イン・ザ・スカイ／マイルス・デイヴィス	220 上
マイルス・デイヴィス・アット・フィルモア／	
マイルス・デイヴィス	217 上
マイルス！マイルス！マイルス！ライヴ・イン・ジャパン／	
マイルス・デイヴィス	228 上
ラウンド・アバウト・ミッドナイト／	
マイルス・デイヴィス	212 下
ラジオ・ミュージック・ソサイエティ／	
エスペランサ・スポルディング	229 下
リーチング・フォース／マッコイ・タイナー	215 下
リラクシン／マイルス・デイヴィス	211 下
夜の彷徨／ラリー・カールトン	222 下

レコードガイドの見方

アーティスト名 **アルバム名** **レーベル** オリジナル盤のレーベル名を記載しています。

発売年 オリジナル盤の発売年を記載しています。

	<p>セヴン・ステップス・トゥ・ヘヴン (CD/A2P) マイルス・デイヴィス (1963)</p>		<p>フォア&モア (CD/A2P) マイルス・デイヴィス (1966)</p>
<p>■ ベイシク・ストリート・ブルース セヴン・ステップス・トゥ・ヘヴン アイ・ファンク・イン・ラヴ・トゥー・イヴイ ソニー・ニータ、ソニー・ラフ、トニー・イヴイ 楽隊員5人 ジョシュア</p>	<p>Spotify Amazon Music Apple Music</p> <p>ここに注目!</p>	<p>■ フォー・アンド・モア ジョシュア・ゴードン ジョシュア・ゴードン ジョージ・ストラップス、トニー・ロビンソン セー・エクス・ノー・グレイター・ラフ・コー</p>	<p>Spotify Amazon Music Apple Music</p> <p>ここに注目!</p>
<p>パーソナル マイルス・デイヴィス (tp) ジョージ・コールマン (s) ロバート・コールマン (p) ロン・カナー (b) フランク・ホラー (ds) ハロルド・ランド (tp) トニー・ウィリアムス (sb)</p>	<p>マイルスの黄金期の素晴らしいアルバム。2、4、6曲目が録音当時は若手だったハービーやトニーが演奏している。ほかの曲と比べて明らかにラウド。そしてグルーヴィー。</p>	<p>パーソナル マイルス・デイヴィス (tp) ハロルド・ランド (tp) ロン・カナー (b) トニー・ウィリアムス (sb) ジョージ・コールマン (p)</p>	<p>若い時代のハービー、トニー、ロンのラウドな演奏が聴ける。ハービーやロンは今とは別人のよう。彼ら若手に刺激され、マイルスの演奏にも力が満ちている。</p>
	<p>テイキン・オフ (ブルーノート) ハービー・ハンコック (1962)</p>		<p>マイ・ファンニー・ヴァレンタイン (CD/A2P) マイルス・デイヴィス (1965)</p>
<p>■ ウォークマン・マン スーパー・ジャズ・フル エクスプレス ザ・ジャズ ジャズ・ファンク アンソニー・ウィリアムス</p>	<p>Spotify Amazon Music Apple Music</p> <p>ここに注目!</p>	<p>■ マイ・ファンニー・ヴァレンタイン ネール・オブ・ユー ロバート・フランク アイ・ソート・アウト・ユー</p>	<p>Spotify Amazon Music Apple Music</p> <p>ここに注目!</p>
<p>パーソナル ハービー・ハンコック (p) フレッド・トッド (tp) オズワルド・ジョージ (s) フランク・ホラー (b) ビル・エヴァンス (ds)</p>	<p>シカゴの実家近くのスイカの売り買いの声からヒントを得た、ハービーの代表曲の1つ「ウォークマン・マン」では、ファンキーなピアノの演奏を楽しめる。</p>	<p>パーソナル マイルス・デイヴィス (tp) ハロルド・ランド (tp) ロン・カナー (b) トニー・ウィリアムス (sb) ジョージ・コールマン (p)</p>	<p>『フォア&モア』と同じ日のステージからバラードを集めたロマンティックなアルバム。ハービーの演奏からもトニーの演奏からも自由が感じられる。</p>

収録曲

オリジナル盤の収録曲を記載しています。

ここに注目!

聴きどころや注目ポイントについて解説しています。

QRリンクからサブスク音楽配信サービスがその場で楽しめます。

パースナル

演奏者名と楽器略号を記載しています。

本書で取り上げた アルバム・プレイリスト (各章別)

サブスク音楽配信サービスで楽しめます。
気になったアルバムをその場で聴けます!

第1章 1950~1960年代、ニューヨークの青春

Spotify



Amazon Music



Apple Music



第2章 引き継がれるジャズの遺伝子

Spotify



Amazon Music



Apple Music



第3章 ロックの洗礼

Spotify



Amazon Music



Apple Music



第4章 レジェンドが欲した青の時代のエネルギー

Spotify



Amazon Music



Apple Music



第5章 新しいジャズを生む才能たち

Spotify



Amazon Music



Apple Music



*各アルバムの本書掲載情報とプレイリスト配信各サービスの掲載情報に
差異がある場合があることをあらかじめご了承ください。

*本書に掲載しているものの、プレイリスト配信各サービスにて配信されていないアルバム、
楽曲があることをあらかじめご了承ください。

*プレイリスト配信各サービスの事由による配信終了につきましては弊社対応外になります。

*本書に掲載情報は2023年10月20日現在のものになります。



フォア&モア

(コロムビア)

マイルス・デイヴィス

<1966>

曲

ソー・ホワット
ウォーキン
ジョシュア〜ゴ〜ゴ
フォア
セヴン・ステップス・トゥ・ヘヴン
ゼア・イズ・ノー・グレート〜ラブ〜ゴ〜ゴ

パーソネル

マイルス・デイヴィス (tp)
ハービー・ハンコック (p)
ロン・カーター (b)
トニー・ウィリアムス (ds)
ジョージ・コールマン (ts)

Spotify



Amazon Music



Apple Music



ここに注目!

若い時代のハービー、トニー、ロンのラウドな演奏が聴ける。ハービーやロンは今とは別人のよう。彼ら若手に刺激され、マイルスの演奏にも力が満ちている。



マイ・ファニー・ヴァレンタイン

(コロムビア)

マイルス・デイヴィス

<1965>

曲

マイ・ファニー・ヴァレンタイン
オール・オブ・ユー
星影のステラ
オール・ブルー
アイ・ソート・アバウト・ユー

パーソネル

マイルス・デイヴィス (tp)
ハービー・ハンコック (p)
ロン・カーター (b)
トニー・ウィリアムス (ds)
ジョージ・コールマン (ts)

Spotify



Amazon Music

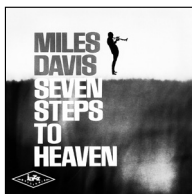


Apple Music



ここに注目!

『フォア&モア』と同じ日のステージからバラードを集めたロマンティックなアルバム。ハービーの演奏からもトニーの演奏からも自由が感じられる。



セヴン・ステップス・ トゥ・ヘヴン

(コロムビア)

マイルス・デイヴィス

<1963>

曲

ベイズン・ストリート・ブルース
セヴン・ステップス・トゥ・ヘヴン
アイ・フォール・イン・ラヴ・トゥー・イージーリ
ソー・ニアー、ソー・ファー
家へおいでよ
ジョシュア

パーソネル

マイルス・デイヴィス (tp)
ジョージ・コールマン (ts)
ビクター・フェルドマン (p)
ロン・カーター (b)
フランク・パトラー (ds)
ハービー・ハンコック (p)
トニー・ウィリアムズ (ds)

Spotify



Amazon Music



Apple Music



ここに注目!

マイルスの黄金期の幕開け的なアルバム。2、4、6曲目が録音当時は若手だったハービーやトニーが演奏している。ほかの曲と比べて明らかにラウド。そしてグルーヴィー。



テイキン・オフ

(ブルーノート)

ハービー・ハンコック

<1962>

曲

ウォーターメロン・マン
スリー・バッグス・フル
エンブティ・ポケッツ
ザ・メイズ
ドリフティン
アローン・アンド・アイ

パーソネル

ハービー・ハンコック (p)
フレディ・ハバード (tp)
デクスター・ゴードン (ts)
ブッチ・ウォーレン (b)
ビリー・ヒギンス (ds)

Spotify



Amazon Music

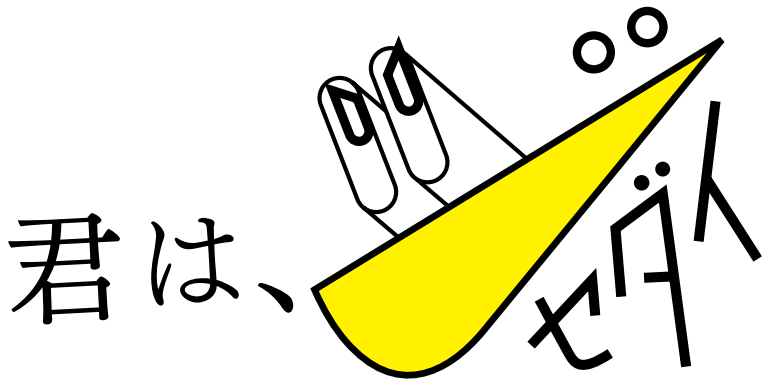


Apple Music



ここに注目!

シカゴの実家近くのスイカの売り買いの声からヒントを得た、ハービーの代表曲の1つ「ウォーターメロン・マン」では、ファンキーなピアノの演奏を楽しめる。



君は、

ジセダイ

何と闘うか？

<https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!